鯨鯢の出自――菅原道真「自詠」「開元の詔書を読む」「謫居春雪」から

東　茂美

一

延喜元年（九〇一）、筑紫の地にあった菅原道真は、つぎのような五言詩を創作している。

開元黄紙詔　開元の黄紙の詔
延喜及蒼生　延喜　蒼生に及ぶ
一為辛酉歳　一つは辛酉の歳のためになり
一為老人星　一つは老人星のためになり
大辟以下罪　大辟以下の罪い
蕩滌天下清　蕩し滌きて天下清めり
省徭優壮力　徭を省きて壮力を優す
賜物恤頽齢　物を賜ひて頽齢を恤れびたまふ
茫々恩徳海　茫々たり　恩徳の海

独有鯨鯢横　独り鯨鯢の横れる有り
具見于詔書　具に詔書に見ゆ
此魚何在此　此の魚し何ぞ此に在らむ
人遵汝新名　人は遵ふ　汝が新しき名なりと
呑舟非我口　舟を呑むは我が口ならじ
吐浪非我声　浪を吐くは我が声ならじ
哀哉放逐者　哀しきかな　放逐せらるる者
蹉跎喪精霊　蹉跎として精霊を喪へり

道真五七歳。この年七月一五日をもって、昌泰は改元され延喜となる。改元の詔書は、中央政府から西海道九国二島を管轄する大宰府にももたらされ、さらに筑前国をはじめ筑紫の各国へと送付されただろう。流人となり、いまや何の権限もない、ほんの名ばかりの大宰員外の帥（権帥）となった道真ではあったが、この筑紫の地でも親しい官吏もあったようで、詔書の写しを目にすることができたらしい。その表現のひとつひとつは検討して後述するが、詔書の文面でもっとも道真の目を引いたのは、「鯨鯢」の二文字だったように思われる。

「鯨鯢」とは、世間のうわさでは道真の新しい名だというのである。承知一二年（八四五）に是善の三男として誕生、幼名は阿古（阿呼）とよばれ、長じて道真、ミチザネともミチマサともよばれたその名を奪われたのである。権力の座から引きずりおろされた者には、いまや抗弁のすべもなく、「哀しきかな」となげきつつ、もはやわが身は生けるしかばねのようだと詠じている。

さてこの「鯨鯢」だが、その典拠として、白居易（七七二～八四六）の諷諭詩「海図の屏風に題す」から、

鯨鯢得其便　　鯨鯢其便を得
張口欲呑舟　　口を張つて舟を呑まんと欲す

を引くのが一般的である。筑紫に配流となった道真がようやく鄙の暮らしにもなれ、詩作の筆をとるようになるのは、「家を離れて三四月」（「自詠」）で、本格的な作品は七言五六句からなる「楽天北窓三友詩を詠ふ」が最初だからである。「古の三友は一生の楽しびなりき、今の三友は一生の悲しびなりき」と、白楽天にとって「三友」（琴・詩・酒）は生涯楽しみの友であったようだが、いまのわたしには「三友」ことに詩という友は、生涯悲しみの友になってしまったと悲しんでいる。

周知のように、道真の創作活動に、白氏の文学は欠くべからざるもので、「鯨鯢」も楽天の詩作に学んだとみて、まずあやまりあるまい。とはいえ、「開元の詔書を読む」をはじめ大宰府時代の作品にもうすこし注目してみると、そこからは、楽天の「海図の屏風に題す」以外の作品も透けて見えてくるのではないか。「自詠」と「開元の詔書を読む」「謫居春雪」の三作を視野にしながら、「鯨鯢」の表現の意味するところを明らかにしようとするのが、ここでのねらいである。

二

まずは、大宰府謫居前後の道真について、確認しておきたい。昌泰四年（九〇一）正月七日、菅原道真は従二位に叙せられたものの、その月末の二五日には藤原時平の讒言によってか、突然、大宰員外の帥として左降。文字どおり出された宣旨は、青天の霹靂、急転直下、奈落の底へ道真を送りこむといった内容である。その宣旨に、「右

大臣菅原道真、翰林より俄に上りて、止足の分を知らず、専権の心有り。佞諂の情を以て、前上皇の御意を欺き惑し、…廃立を行ひ父子の志を離間し、兄弟の愛を破らむと欲ふ。詞は順にして、心は逆、是皆天下の知る所なり。宜しく大臣の位に居らしむべからず。…」（『政事要略』巻22）という。

「翰林」とは唐代に創設され、詔勅の起草などをつかさどる翰林院、あるいはそこに属する官僚である「翰林学士」の略称。「翰林学士」は本朝の文章博士にあたる。したがって、「翰林より俄に上りて」とは、要するに、貞観一九年（八七七）一〇月、この年の正月から式部少輔だった道真が文章博士をも兼任し、これを契機に右大臣にいたるまで破竹の栄進をかさねたのをいうのだろう。右の宣旨によると、にもかかわらず、分をわきまえず権力のすべてをわがものにしようとするのが道真だ、と指弾するのである。

さらに宣旨は、いう。宇多上皇におもねり諂ってあざむき惑わし、醍醐天皇を廃位し、娘婿である斎世親王を位につけようとして、父子兄弟の仲を裂こうとしている、ことばはおだやかなのだが、心はその逆、これは天下のひろく知るところではないか、大臣の位にとどめるべきではない、と。右大臣のポストには大納言の源光が、兼務していた右近衛大将には中納言の藤原定国が任ぜられ、道真には「大宰権帥」があたえられた。もちろん源光と定国が、最初から時平と共謀していたと解すべきだろう。それを裏づけるかのように、詮議らしい詮議もなく、道真が追い立てられるように京都を離れたのは、宣旨が出てから一旬も数えない二月一日である。

離家三四月　家を離れて三四月
落涙百千行　落つる涙は百千行
万事皆如夢　万事皆夢の如し
時時仰彼蒼　時時彼の蒼を仰ぐ　（「自詠」）

右は、道真が配所の筑紫で暮らすようになってからの、もっとも早い時期の「自詠」と題された一作。まずは、この作品から、ていねいに読んでみたい。

「自詠」という題は、唐代詩人にさほどひろく見られるわけではなく、白楽天の特徴ともいうべき詩題であり、つぎのような作品がこれにあたる。[1]

(1) 夜鏡隠白髪、朝酒発紅顔、可憐仮年少、自笑須臾間…誠知此事非、又過知非年、豈不欲自改、改即心不安、且向安処去、其余皆老閑（「自詠」）

(2) 悶発毎吟詩引興、興来兼酌酒開顔…誰能頭白労心力、人道無才也此間　（「自詠」）

(3) 形容瘦薄詩情苦、豈是人間有相人…唯是無児頭早白、被天磨折恰平均　（「自詠」）

(4) 随宜飲食聊充腹、取次衣裘亦煖身…随分自安心自断、是非何用問閒人　（「自詠」）

(5) 白衣居士紫芝仙、半酔行歌半座禅…但問此身銷得否、分司気味不論年　（「自詠」）

(6) 細故随縁尽、衰形具体微、…自余君莫問、何是復何非　（「自詠」）

(7) 髪白面微紅、醺醺半酔中…仍聞好事者、将我画屏風　（「自詠」）

(8) 白鬚如雪五朝臣、又値新正第七旬、老過占他藍尾酒、病余収得到身…大暦年中騎竹馬、幾人得見会昌春（「喜入新年自詠」）

(9) 寿及七十五、俸霑五十千、夫婦偕老日、甥姪聚居年…　（「自詠老身示諸家属」）

道真の「自詠」は、こうした楽天作をじゅうぶんに意識したものというべきだろう。楽天の「自詠」をふまえてみると、道真「自詠」の文字面では語り尽くせないメッセージが読みとれるように思われる。そのためにも楽天の「自詠」詩群を、たどってみる必要があるだろう。

上掲の八作品のうち、(8)の会昌二年の新年を迎えた七一歳の楽天がうたう「新年に入るを喜びて自ら詠ず」と七五の老境をうたって家族に示した(9)「自ら老身を詠じ、諸の家属に示す」の二例以外、いずれも「自詠」という題で自身の境遇を詠じ、独詠の色合いが際やかである。三友にひとつである酒や酔いをうたうのは、(1)「朝酒発紅顔」「一琖」「一酌」、(2)「酌酒開顔」、(5)「半酔」「飲酒」、(7)「半酔」、(8)「藍尾酒」[2]と五例であり半ばをこえる。さらに老いをうたうのは、(1)「白髪」、(2)「頭白」、(3)「頭早白」、(4)「老亀」、(6)「老」と、これまた楽天らしく、頻出する表現である。(1)では「酔先生」、(4)では「老亀」、(5)では「維摩」「綺季」、(7)では「痩居士」「狂老翁」と、自身の抱懐をいにしえの人物に託しながら具象化している。「酔先生」は竹林七賢のひとり劉伶が、その作「酒徳頌」で登場させた「大人先生」なる人物だろう。

大人先生といふ者あり。天地を以て一朝と為し、万期を須臾と為し、日月を扃牖と為し、八荒を庭衢と為す。行くに轍迹無く、居るに室廬無し。天を幕とし地を席とし、意の如く所を縦にし、止れば則ち巵を操り觚を執り、動けば則ち榼を挈げ、唯、酒のみを是れ務む。焉んぞ其の余を知らんや。(『文選』巻47)

「扃牖」はかんぬきと窓、「巵」と「觚」はさかずき、「榼」は酒樽の意。大人先生は、天地開闢以来の時間を一日とし、たとえ一万年でさえも瞬時のほどであり、日月を門とし、かつ全世界を自邸の庭とする人物。行く時には歩く跡もとどめないように歩き、住んでいても住みかさえ人が知らないほどである。天空を屋根とし大地を敷物に、思うままにふるまい、万事とらわれるものはなく、もっぱら酒だけに精を出している。これが、大人先生の正体だ。

楽天はこうした「酒徳頌」を享けて、「昔酔先生あり、地を席にして天を幕にす」と詠じている。大人に仮託された劉伶は、その妻が酒をすて酒器をこわして度をこした飲酒をいさめたのに対し、まるで耳をかさず「天、劉伶を生み、酒を以て名を為さしむ。一飲一斛、五斗にして酲を解く。婦人の言は慎しんで聴く可からず」と豪語する。

とどのつまりは酒を飲み肉をくらい、すっかり酔っぱらってしまったという（『世説新語』任誕）。

これに対して、楽天は「眠り罷みて又一酌、酌み罷みて又一篇」だけれど、「面を回らして妻子を顧みれば、生計方に落然たり、誠に此事の非なるを知り、又非を知る年を過ぐ、豈自ら改めんと欲せざらんや」とうたう。一酌また一酌と酒を飲み、創作を重ねるものの、ぐるりと妻子らの顔を見回わすと、生計に悩まされているのが哀れだし、その原因がだらしないわが暮らしぶりにあることは明らか、ましてやすでに分別あるべき五〇才[3]を過ぎているしで、改めるべきは改めるべきだ、と妻子のことを顧みている。妻の立場からすれば、劉伶よりも楽天のほうがすこしはマシか。

ただしつづけて、この酒三昧の暮らしをやめてしまえば、「即ち心安からず、且く安処に向ひて去らむ、其余は皆老いて閑なり」と、こころに不安が満ちてくるだろうから、こころの安寧を最優先して、この際、あとの問題の一切は、放り出してしまおう、というのだ。こうなると、もはや劉伶とのちがいは、五十歩百歩だろう。こうして楽天は、いにしえの竹林七賢人のひとりである劉伶と対話するのである。

(4)の「老亀」は「老亀豈犠牲の飽くを羨まんや」とうたわれ、『荘子』の「秋水篇」と「列禦寇篇」のつぎのくだりをふまえたもので、両篇（部分）を引用してみよう。

・荘子濮水に釣る。楚王、大夫二人をして往き先んぜしむ。曰く、願はくは竟内を以て累はさん、と。荘士竿を持して顧みず。曰く、我聞く、楚に神亀有り、死して已に三千歳なり。王、巾笥して之を廟堂の上に蔵すと。此の亀なる者は、寧ろ其れ死して骨を留めて貴ばれんか、寧ろ其れ生きて尾を塗中に曳かんか、と。二人大夫曰く、寧ろ生きて尾を塗中に曳かん、と。荘子曰く、往け。吾将に尾を塗中に曳かんとす、と。（秋水篇）

・或るひと、荘子を聘す。荘子、其の使に応へて曰く、子、夫の犠牛を見しや。衣するに文繡を以てし、食はす

に芻萩を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及びて、孤犢たらんと欲すと雖も、其れ得可けんや、と。

（列禦寇篇）

荘子が濮水で釣りをしている。そこへ楚王の威がつかわしたふたりの大夫がやってきて、王の意向を伝え、国政をゆだねたいという。荘子は棹をにぎったまま振り向きもせず、楚の国にあるという「神亀」を話題にする。廟堂にあって亀卜に用いられている神亀は、死んで三〇〇〇年になるが、さて亀の身になってみると、袱紗につつまれ箱の中で干からびた甲羅を残すほうがいいか、それとも生きて泥の中で尾をひきずっていたほうがいいか。その泥亀と同様に、用を為さないまま何の束縛もうけず、天寿をまっとうしたい。これが荘子の主張するところである。「列禦寇篇」では、「秋水篇」の「神亀」が「犠牛」におきかえられている。ここでは、縫いとりをした美しい錦を着せられ、ふんだんに牧草や豆を与えられ、やがては宗廟祭のためのいけにえになるくらいなら、ただの子牛のほうがよほどましだというのである。

高位高官に任じられて華やかな生活をおくるのも、たとえば甲羅になって大切にされる「神亀」やいけにえになるゆえに優遇される「犠牛」のようなものであって、世俗的な名利はわが身わが心を安らかに保つに足りないものである。したがって、いたずらに人為の栄誉をもとめることでなしに、いわば自然の大道に安住して生きるべき。これが荘子の説くところである。

白楽天が「老亀豈犠牲の飽くを羨まんや」と詠じるのは、たんに『荘子』「秋水篇」「列禦寇篇」から語句を借りただけではなく、荘子が述べる生き方そのものへの共感があったと思われる。(4)「自詠」はつぎのように結ばれている。

分に随つて自ら安んじて心に自ら断ず、是非何を用てか人に問はん。

分相応に自ら安んじて生きることこそ、何よりも人生には肝要であるのを、いまさら他人に問うまでもなく、じゅうぶんわかっているというのである。

荘子といえば、(7)の「狂老翁」も荘子とみてよいだろう。『荘子』「至楽篇」のつぎのくだりを、ふまえている。引用がやや長くなるが、一読したい。

荘子の妻死す。恵子之を弔ふ。荘子則ち方に箕踞し、盆を鼓して歌ふ。恵子曰く、人と与に居て、子を長じ身を老せり。死して哭せざるは、亦足れり。又盆を鼓して歌ふは、亦甚だしからずや、と。荘子曰く、然らず。是れ其の始死するや、我独り何ぞ能く慨然たること無からんや。其の始を察するに、本生無し。徒に生無きのみに非ずして、本形無し。徒に形無きのみに非ずして、本気無し。芒芴の間に雑はり、変じて気有り。気変じて形有り、形変じて生有り。今又変じて死に之く。是れ相与に春秋冬夏四時の行を為せるなり。人且つ偃然として巨室に寝ぬ。而して我噭噭然として、随ひて之を哭せば、自ら以為へらく、命に通ぜずと。故に止むるなり、と。

荘子の妻が亡くなったので、恵子が弔問に出かけた。すると荘子は、哀哭するどころか、足を投げ出してすわり、缶を叩きながらうたっている。恵子は夫たるもののする行為ではないと強く非難するのだが、荘子は以下のように答えるのである。もともととりとめのないものの中に混じっていたものが、やがて陰陽の気を生じ、その気が変化して肉体となり、その肉体が変化して生命を具えたものとなった、そして今はそれが変化して死んでいく。春夏秋冬が互いに四季をくりかえすのと同じ自然の運行であって、今、妻は天地という大きな寝屋で安らかに眠っている。にもかかわらず、このわたしが大声で嘆き悲しんだなら、自然の摂理をまるで理解してないようではないか。白楽天は、荘子のいう生と死を一つとしてそれを超え「翛然」(4)と生きる生き方を、じゅうぶんに意識していたのである。

(5)の「維摩」と「綺季」、さらに(7)の「瘦居士」についてもふれておこう。「維摩」はひろく知られるように、インド中部の毘耶離大城（パーサーリ）で、眷族や妻子とともに暮らす大商人の維摩詰（ヴィラマキールティ）[5]である。「維摩」は音写したものだが、べつに「無垢称」とか「浄名」と称されるのは、こうした意味を反映したもの。後漢時代の『古維摩詰経』（後漢・厳仏調訳出）をはじめ、『維摩詰経』（仏法普入道門三昧経、呉・支謙訳出）、『維摩詰所説法門経』（維摩詰説不思議法門経、晋・竺法護訳出）、『異維摩詰経』（異毘摩羅詰経、晋・天竺叔蘭訳出）、『維摩詰所説経』（不可思議解脱経、姚秦・鳩摩羅什訳出）と、相次いで漢訳がなされ、ことに鳩摩羅什（三四四～四一三）が訳出した『維摩詰所説経』（ヴィマラキールティ・ニルデーシャスートラ）は全土にわたってひろく用いられた。

『維摩詰所説経』は、病になった維摩居士を見舞におとずれた人びとを前に、人の身の虚しいことをさまざまにたとえた「維摩十喩」[6]と、釈迦の使いとしておとずれた文殊（モンティシュリー）菩薩との「不二法門」についての問答[7]を中心にして、弁舌さわやかな維摩の活躍を語ってやまない。楽天が(7)で「瘦居士」と表現するのは、この維摩が方便として病に臥ったことによるのだろう。

「方便品」から、維摩居士の人となりを述べるくだりの一部を摘記してみよう。

資財無量にして諸の貧民を摂し、奉戒清浄にして諸の毀禁を摂し、……白衣為りと雖も、沙門清浄の律行を奉持し、居家に処すと雖も三界に著せず、妻子有ることを示せども常に梵行を修し、眷族有ることを現ずれども、常に遠離を楽ひ、…諸の異道を受くれども正信を毀らず、世典を明らかにすと雖も常に仏教を楽ひ、一切に敬せられて供養中の最と為る。

維摩居士は、大地主でおおぜいの使用人をもつ財産家であり、その財産をほどこして貧しいものたちを助け、在

家でありながら出家したものと同じように、仏の教えを実践して情欲や感覚にまどわされることはなく、妻子や眷族がありながら世俗になずむことはなく、異なる教えを受けたにしても仏の教えをまげることはなく、煩悩や束縛から解放された解脱の境地に達している。「仏の威儀に住して、心大いなること海の如し。諸仏咨嗟へ・弟子・釈・梵・世主の敬ふ」（仏の教えのとおりに実践し、その心は海のようにある。もろもろの仏は維摩をほめ、弟子・釈・梵・世主らがみな尊敬してやまない）人物だというのである。[8] 維摩はその名のように、闊達無碍なる境地にあるがゆえに、

講論の処に入りては導くに大乗を以てし、諸の学堂に入りては童蒙を誘開し、諸の淫舎に入りては欲の過を示し、諸の酒肆に入りては能く其の志を立つ

と。このような維摩詰に、楽天はみずからを譬えてみせるのである。

とはいえ、楽天はなかなか維摩詰のように煩悩を脱して悟りの境地を会得できない。(5)「自戒」の「今日の維摩、兼ねて飲酒す」は、毘耶離大城で生きた維摩詰は酒など呑まなかっただろうが、今日の維摩詰でありたいと願うこのわたしは、酒をこよなく愛し、信徒として生きるために犯してはならないもっとも基本的なルールである「五戒」[9]さえ守れずに、暮らしているとうたっている。「五戒」は、出家者はもちろん在家であっても信徒の守るべきいましめで、「不飲酒」もそのひとつである。維摩居士のように酒家にあって「能く其の志を立」てることができないのが、楽天なのであった。

さらに楽天は「綺季」を引き合いに出している。「綺季」とは商山四皓のひとり綺里季をいう。前漢高祖の時代に秦末の乱世をさけ、東園公、夏黄公、角里先生そして綺里季は商山に隠遁していた。「皓」は四名ともに眉もあご鬚も白かったところによる。かつて高祖が招聘したが、けっして応じようとはしなかったという隠者たちである。

高祖は呂后との間にもうけた劉盈をしりぞけ、晩年の寵妃戚夫人の子趙王如意を太子に立てようとする。困り果てた呂后は、建成侯呂沢に相談して、留侯張良にどのように対処すべきかを問うた。この留侯のアドバイスのなかで商山の四皓が登場している（『史記』巻25「留侯世家」）。

此れ口舌を以て争ひ難きなり。顧ふに上致すこと能はざる者有り、天下に四人有り。四人の者は年老いたり。皆以為へらく、上は人を慢侮すと。故に逃れて山中に匿れ、義として漢の臣と為らず。然れども上は此の四人を高しとす。今、公、誠し能く金玉璧帛を愛む無く、太子をして書を為らしめ、卑辞安車、因つて弁士をして固く請はしめば、宜しく来るべし。来らば以て客と為し、時時従へて入朝し、上をして之を見しめば、則ち必ず異として之を問はん。之を問ひ、上、此の四人の賢なるを知らば、則ち一助なり。

張良がいうのは、こうである。誰が王位を継承するかは皇帝の家庭の事情によるのだから、百臣をもってしても、何の役にもたたないだろう。しかしながら、高祖が天下の賢人を招こうとしたとき、山中にかくれて出て来なかった四人の賢人がおり、ついに漢の臣にならなかった。とはいえ主上は彼らを高潔の主として尊敬している。だから、礼をつくしてこの四人を招聘し迎え入れよ。それを主上が知れば、きっと皇太子の一助となるだろう、と。そこで呂后は、呂沢に命じて人をつかわし太子の書面をとどけ、この四人を迎えて呂沢の賓客としたのである。

ある日、高祖は老人たちに会うのだが、それがかつてどれほど召しても山中から出てこなかった四皓と知って大いに驚き、なぜ逃げかくれしていた四皓がいま太子につきしたがっているのかを問う。

陛下は士を軽んじ善く罵る。臣等、義として辱を受けず。故に恐れて亡げ匿れたり。竊に聞く、太子は人と為り、仁孝恭敬にして士を愛し、天下、頸を延ばして太子の為に死するを欲せざる者莫しと。故に臣等来れるのみ」と。上曰く、「公を煩はさん。幸に卒に太子を調護せよ」と。

陛下は士を軽んじてよく罵倒されました。わたくしどもは義理にもその恥辱をうけられませんので、恐れて隠れていました。しかし太子の人がらは仁・孝・恭・敬であり、人びとは太子のためなら死もいとわないという評判、それを知って出て来たのだというのである。これを知って、高祖は四皓が補佐するのなら、太子盈を廃して如意にかえる必要はないと判断したのだった。戚夫人に告げたことばは、こうである。「我之を易へんと欲すれども、彼の四人之を輔け、羽翼已に成り、動かし難し。呂后は真に而の主なり」。

以上が、『史記』の語る商山四皓のエピソードである。楽天はこうした四皓譚から、意に染まない招聘に応じることなく、商山で高潔な暮らしをつづけた綺里季にくらべながら、安易に俸禄を食んでいるわが身を顧みるのである。

こうしてみると、楽天の作品に見られる引用は、たんに語句を借りたのではなく、そこから見えてくるさまざまな人物の生き方なり主張なりを意識し、共鳴するところから生じているというべきだろう。さらにいうなら、道真の「自詠」が楽天のそれを襲うことによって成ったのは、明らかである。そうであれば、道真が作品中「万事皆夢の如し」とうたうのも、一例として維摩居士とその十喩をも、じゅうぶん意識していたからではないか。

維摩は方便として病人となり、[10] 以下のように説くのであった。

諸の仁者よ、是の身は無常にして、強きこと無く、力無く、堅きこと無く、速に朽つるの法にして、信ず可からざるなり。…是の身は聚沫の如し、撮摩ふ可からず。是の身は泡の如し、久しく立つことを得ず。是の身は炎の如し、渇愛より生ず、是の身は芭蕉の如し、中に堅有ること無し。是の身は幻の如し、顛倒より起る。是の身は夢の如し、虚妄の見為り。是の身は影の如し、業縁より現ず。…

ここでは、維摩は病を得たその身がもろいものであり、実態をともなわないものであるかを、さまざまな天象地

象に譬えている。先にふれた「維摩十喩」といわれるくだりである。もちろん「…は夢の如し」という比喩は、『維摩詰所説経』だけに見られるものではない。この世界の一切は実態がなく「虚妄」（虚誑とも）であることを、「諸の妄法は、譬へば陽焔・火輪・垂髪・乾闥婆城・夢・幻・鏡像の如し」（『大乗入楞伽論』唐・実叉難陀訳出）、「一切諸趣に受生するは悉くみな夢の如し」（『大方広仏華厳経』同上）、「一切法は幻の如く、夢の如く、響の如く、像の如く、光影の如く、陽焔の如く、空花の如く、尋香城の如く、変化事の如し」（『大般若波羅蜜多経』唐・玄奘訳出）と説き、例の枚挙にいとまがない。

つづめていうなら、道真にとって、維摩の主張とは仏教知識のわくを越えて、より近しいものだったように思われる。

つづいて道真の一作から、「時時、彼の蒼を仰ぐ」についてふれよう。「蒼」（蒼天）はふるく『詩経』「国風（秦風）」の「黄鳥」をふまえているとするのが、一般的である。

・交々たる黄鳥は、棗に止まる、誰か穆公に従ふや、子車奄息、維れ此の奄息は百の夫にも特せんに、其の穴に臨みて、惴惴と其れ慄く、彼の蒼き者は天、我が良き人を殲くす、如し贖ふ可くんば、人は其の身を百にせん。

秦の穆公は春秋時代の名君として知られ、さまざまな業績をあげた。ところが、周の襄王三一年（前六二一）その死にあたって、一七〇人もの家臣を殉死させた。そのなかには「三良」と呼ばれる有能な人材（奄息・仲行・鍼虎）もふくまれていて、人びとはかれらの死をたいへん悼み、「黄鳥」をうたったという。「黄鳥」はカラウグイス。同じ『詩経』「国風（周南）」の「葛覃」や「小雅篇」（鴻鴈之什）の「黄鳥」に見られるように、木に集まって籾・粟、黍などの穀物をついばむ、厄介な鳥をいうのだろう。

カラウグイスが、ナツメの木にとまって啼いている。穆公に殉じたのは誰だろう、子車氏の子である奄息。奄息は一〇〇人の男にも匹敵しようという逸材の人物。その奄息が、いま墓穴をまえにぶるぶるとふるえ、わなないているではないか。蒼い天は、なぜにこの良人を殺したのか、もし身代わりがきくなら、われわれは一〇〇の身を差し出すものを。

二章・三章も大同小異の表現で、それぞれ仲行と鍼虎を哀れんでいる。「蒼天」は春の空や東方の空といった意味もあるが、ここでは天神地祇の「天」の意味であり、「天つ神よ、心なくも愛する人を殺しなされた」[11]と解するのがよい。

そうであれば、道真の「時時彼の蒼を仰ぐ」も、蒼い空をふり仰いで嘆いたというだけではないだろう。穆公の遺命にしたがったとはいえ、いにしえの三良が殺されてしまったと同然、わが身の運命の不条理を訴える。蒼天はかつて「良人」である奄息らを殺したように、いま道真を凄惨な境遇へと追いたて、「万死兢兢たり、跼蹐の情」[12]をもって暮らさねばならぬ、いわば人間として殺され「鯨鯢」として生きることを強いるのである。「なぜ天神は、わたしにこれほどまでの無惨な境遇をお与えになるのか」。これが道真の真情だろう。

三

道真が詠じる「鯨鯢」が、白楽天の「海図の屏風に題す」に学んだことばであるのは、すでに紹介したとおりだが、楽天の一作とはつぎのような作品である。[13]

海水無風時、波濤安悠悠　　海水風無き時、波濤安ぞ悠悠たる。

鱗介無小大、遂性各沈浮
突兀海底鼇、首冠三神丘
釣網不能制、其来非一秋
或者不量力、謂茲鼇可求
鼉鼉牽不動、綸絶沈其鉤
一鼇既頓頷、諸鼇斉掉頭
白濤与黒浪、呼吸繞咽喉
噴風激飛廉、鼓波怒陽侯
鯨鯢得其便、張口欲呑舟
万里無活鱗、百川多倒流
遂使江漢水、朝宗意亦休
蒼然屏風上、此畫良由有

鱗介小大と無く、性を遂げて各沈浮す。
突兀たり海底の鼇、首に三神丘を冠し、
釣網も制する能はず、其来ること一秋に非ず。
或者力を量らずして、茲鼇求む可しと謂ひ、
鼉鼉牽けども動かず、綸絶えて其鉤を沈む。
一鼇既に頷を頓れば、諸鼇斉しく頭を掉ふ。
白濤と黒浪と、呼吸して咽喉を繞る。
風を噴きて飛廉を激し、波を鼓して陽侯を怒らしむ。
鯨鯢其便を得、口を張つて舟を呑まんと欲す。
万里活鱗無く、百川倒流多し。
遂に江漢の水をして、朝宗意亦休せしむ。
蒼然たり屏風の上、此畫良に由有り。

風もないときには、波もおだやかで、大きな魚も小さな魚もそれぞれの性分で暮らしている。ところが、突然海底から「三神丘」を頭にいだいた「鼇」が現れるという。「鼇」は大亀の意。「三神丘」とは、渤海の東方にあるという蓬莱・方丈（方壺）・瀛州をいうが、さらに岱輿・員嶠をあわせて五山という。たとえば『列子』「湯問」によれば、こうである。[14]

（渤海の東に五山がある…）、而るに五山の根は、連著する所無く、常に潮波に随つて、上下し往還して、暫くも峙どまるを得ず。仙聖之を毒み、之を帝に訴ふ。帝、西（四）極に流れて、群聖の居を失はんことを恐れ、

乃ち禺彊に命じ、巨鼇十五をして、首を挙げて之を戴き、迭ひに三番を為して、六万歳をして一たび交らしむ。五山始めて峙どまりて動かず。

五山の根元といえば、かつてはつながっておらず、常に波のまにまに上下してゆき廻り、静かにとどまってはいなかった。そこに住んでいる仙人たちは困り果て、天帝に訴え出たところ、天帝は大きな亀一五匹に頭をもたげさせて五山を載せ、六万年ごとに三交代させることにした、という。こうして、五山は一所にとどまるようになった。

ところが、これには後日談がある。

而るに龍伯の国に大人有り、足を挙ぐること数歩に盈たずして、五山の所に曁ぶ。一釣にして六鼇を連ね、合せ負ひて其の国に趣き帰り、其の骨を灼いて以て数ふ。是に於て岱輿・員嶠の二山、北極に流れ、大海に沈む。仙聖の幡遷する者、巨億もて計る。

北方にあるといわれる龍伯国の巨人が、五山のあるところにやって来て、一五匹いる鼇のうちの六匹を釣りあげ、亀卜の材料に使ってしまった。一五匹でささえていたのに六匹がいなくなったので、支えを失った岱輿・員嶠の二山は流れていき、ついには大海原に沈んでしまう。そこに住んでいた仙人は移住するしかなく、何億もの仙人たちが被害をこうむったという。楽天が「或者力を量らずして、茲鼇求む可しと謂ひ…」は、このあたりのエピソードをふまえたものだろう。

『全詩集』は、楽天の創作が「元和己丑年作」の自注があることから、安禄山の乱以降、軍閥となった地方の藩鎮（いわゆる節度使）の世襲化による政治的不安と叛乱を諷したものと解している。徳宗の時代、軍閥の叛乱は首都の長安までも侵し、一時近郊の奉天まで避難しなければならぬほどの激しさだった。祖父徳宗のあとをうけて藩鎮問題にあたった憲宗は、節度使王士真が没したのを機会に、河北の藩鎮の世襲制を革めようとしたものの、政権

の枢軸にあった裴垍や李絳らは、性急な変革は藩鎮のさらなる抵抗と叛乱をひき起こすので慎重にと諫言する。

ただ裴垍のポストを奪おうともくろんでいた宦官の吐突承璀は、王承宗の叛乱に際して兵を請い、これを鎮圧。藩鎮との間はしばらく小康を保った。その後、地方の軍閥を抑えるために派遣された監軍（いわばお目付け役で、首領は宦官である）の力が増大するという、まことに皮肉な結果となってしまったのである。

そうした朝廷の緊張をさらに高めたのが、皇太子鄧王李寧の夭逝である（一九才で没）。皇位継承の候補者として、次男の澧王李惲と三男遂王李恆の名があがる。吐突承璀は李惲を推したが、李惲の生母の身分が低く、憲宗は別の宦官グループの推す李恆を皇太子とした。李恆の母は郭貴妃である。その後しばらく吐突承璀は地方へとしりぞけられたが、中央政界に復活、ひそかに李惲の擁立をはかっていたらしい。李恆を支持する宦官グループは、吐突承璀の策略で当時病害におかされていた憲宗が廃太子に奔ることを恐れ、李恆の即位をいそぐ。元和一五年（八二〇）正月に、憲宗が宦官のひとり陳弘志に殺されるまで、こうした緊張がつづいたといってよいだろう。憲宗が殺害されたあと、吐突承璀も李惲もすぐに抹殺された。

楽天は大亀を釣り上げようとした「或者」、「頷を頓」た一匹の大亀、それにならって風をおこし波をわかせて大混乱させた「諸鼇」、そして好機を得たりと荒れ狂う「鯨鯢」に具体的な対象となるものをあげているわけではないが、「海図の屏風に題す」の一作とは、右のような情況を諷したというのが、『全詩集』の解釈である。そうであれば「鯨鯢」とは、皇位継承に絡んだ政争のうえ、澧王李惲とともに殺された吐突承璀とみてまちがいあるまい。

ちなみに、楽天作の「口を張つて舟を呑まんと欲す」も、『列子』「楊朱」の、

呑舟の魚は、枝流に游ばず、鴻鵠は高く飛んで、汚地に集まらず。何となれば則ち其の極遠ければなり。…将に大を治めんとする者は、細を治めず、大功を成さんとする者は、小を成さず、と。此の謂なり。

をふまえている。楊朱は戦国時代初期に「為我説」（自己本位論）で有名な思想家だが、『列子』はその楊朱に仮託しながら、もっとも大切なものは人びとが多くの犠牲をはらってまでも守ろうとする名声などではなく、生きていることの幸福、生命の保全であると主張している。舟をひと呑みするような魚は、小さな支流の川にはのぼってはいかない、鴻鵠の類は高く空を飛び、小さな地上の水たまりには集まったりしない。ここでは、ささいな日常にこだわるのでなしに、大きなものを治めるべきであり、小さな仕事でなしに大きな仕事をなしとげよ、というのである。

本来「呑舟の魚」は支流など目もくれないはずなのだが、楽天詩では、逆に、その「呑舟の魚」が舟を呑もうとし、荒れ狂ったものだから万里にわたって生きた魚はまったく見あたらず、川の流れはことごとく逆流するありさまで、長江や漢水にいたるまで、流れがストップして海にそそがなくなってしまった、とうたった。「朝宗」とは、百川が海にそそぐの意。まさに「呑舟の魚」おそるべし、である。

ところで、道真作の「開元の詔書を読む」のなかに登場する「鯨鯢」は、「独り鯨鯢の横れる有り」に「具に詔書に見ゆ」と付記されているように、もとは開元詔書の一文にあったものらしい。詔書そのものは現存しないが、三善清行の昌泰四年（九〇一）の「改元して天道に応ぜんことを請ふの状」（いわゆる『革命勘文（かんもん）』）には、

一　今年大変革命の年に当たる事
二　去年の秋彗星が見ゆる事
三　去年の秋以来老人星が見ゆる事
四　高野天皇、天平宝字九年を改めて天平神護（しんゆう）元年と為すの例

の「証拠四条」が主張されている。『易緯』の辛酉革命を原点としながら、変革の年であるといい、彗星が現れた

のは漢や晋の天文志によれば「旧を除き新を布く象」であり、老人星が現れたのは、「聖主長寿にして、万民安和の瑞」であるとする。さらに高野天皇（称徳）が、「逆臣藤原仲麻呂」を誅伐し天平宝字九年を改め天平神護とした例にならい、改元すべきだというのである。

藤原仲麻呂（七〇六～七六四）は光明皇后や孝謙天皇の寵を得て兄豊麻呂を左遷、聖武天皇が指名した道祖王をしりぞけて娘婿の大炊王を皇太子に立て、自らは天平宝字元年（七五七）紫微内相となって権勢をほしいままにした。翌年、大炊王が即位して淳仁天皇になり、仲麻呂は「太保」（右大臣）となって名を恵美押勝と改名、さらに同四年には「太師」（太政大臣）。しかし次第に台頭してきた道鏡（？～七七二）の勢力に抗して謀反をはかって蜂起したものの、近江へ敗走。捕縛され妻や子、そして主たる郎党三四人とともに斬られてはてた。[15]

『続日本紀』天平宝字八年九月、押勝の叛乱の収拾をはかった高野天皇（孝謙）の宣命（第二八詔）によると、

逆に穢き奴仲末呂い詐り奸める心を以て兵を発し朝庭を傾け動かさむとして鈴・印を奪ひ、復皇位を掠ひて、先に捨てきらひ賜ひてし道祖が兄塩焼を「皇位には定めつ」と云ひて官印を押して天下の諸国に書を散ちて告げ知らしめ、復云はく、「今の勅を承け用ゐよ、先に詐りて勅と称ひて在る事を承け用ゐること得ざれ」と云ひて、諸人の心を惑乱はし、三つの関に使を遣りて窃に関を閉ぢ、一つ二つの国に軍丁を乞ひ兵を発さしむ。此を見るに仲末呂が心の逆に悪しき状は知りぬ。…

仲麻呂がいかに悪事や不義をたくらんだかを告発するのだが、この勅では「仲麻呂」が「仲末呂」と書かれている。これは後の第三三詔（天平神護元年三月）でも「逆に悪しき仲末呂と心を同じくして朝廷を動かし傾けむと謀りて在る人に在り」とあり、おそらく「仲末呂」は恵美押勝仲麻呂への侮蔑の表記とみてよいだろう。「逆賊恵美仲麻呂、為性凶悖にして、威福日に久し」（天平宝字八年九月）とも指弾されるのが、政争にやぶれた仲麻呂へ

の形容。「凶悖」とは、よこしまで道義にもとるというのである。

こうした仲麻呂が、いまの道真に重ねられている。かつての仲麻呂のように、いま道真は、三善清行の「予て革命を論ずる議」からことばをそのまま引けば、「仁恩は其の邪計を塞ぎ、矜荘は其の異図を抑へる」と記される、その「邪計」を謀り「異図」をもつやからであり、恵美押勝仲麻呂にひとしい凶禍をもたらす逆臣なのである。仲麻呂が「仲末呂」と貶められたように、開元の詔書には、道真を「鯨鯢」と名をかえ追放する旨が書かれていたのだろう。

「鯨鯢」ではないが「鯨鯢」とともに登場する「鼇」は、じつは道真自身がこの度の変事で、用いたことばであるのに留意してよいだろう。昌泰二年（八九九）二月一四日、右大臣右大将となったのだが、右大臣の任を拝することが、どれほど危ういかを聡明な道真が知らなかったはずはなく、三度にわたって辞表を提出している。その第三表に、

言さく、今月四日、中使従五位下守右近少将源朝臣緒嗣、天旨を奉伝し、懇請を聴さず。臣、恩を戴くこと惟れ重く、海鼇の首勝へ難く、感を祈むること休せず、皐鶴の声竭きんとす。…人孰れか彼の盈溢を恕さむや。顛覆は流電より急に、傾頽は踰機に応ぜんのみ。

と、「鼇」が現れる。天子の恩の重さは、あの一五匹の大亀さえ首でささえるには重すぎるし、その恩のありがたさを叫びつづけては鶴の声も涸れんばかり。とはいえ、誰もこのような身に余る恩寵を許すはずはなく、失脚は電光よりも急に、没落は弾き弓よりも早くおとずれるにほかならない、と。天子の恩をささえる「鼇」にさえなれない「天資浅薄、飾るに蛍雪の末光を以て」（才能に乏しくいささか刻苦勉励して、かつがつの教養を身につけた）する程度の者でしかないというのが、道真の言である。

こうしてみると、その「鼇」どころか、「鼇」の騒動に乗じ「其便を得て」（「海図の屏風に題す」）縦（ほしいまま）にしている「鯨鯢」こそ、右大臣のポストまでも手中にした道真、おまえにふさわしい名ではないか。開元の詔書で、道真を侮蔑して「鯨鯢」が選ばれたのは、上述のような事由によるのだろう。それを見た道真が「蹉跎（さた）として精霊を喪（うしな）へり」と嘆いたのは、すでにふれたとおりである。

「蹉跎」の「蹉」はつまづく、時機を失うの意。「跎」も同意。したがって「蹉跎」は顛躓（てんち）、すなわちつまづくが原義で、さらに時機を失う、志を得ない、生活が思うようにならず不遇であるといった意味がある。張九齢や崔湜らの作品にも例があるが[16]、白楽天の好む表現であって、つぎのような作品を列挙できよう。

(1) …但信言有玷、不察心無瑕、容光未銷歇、勧愛忽蹉跎　（「続古詩十首」）
(2) …入山焼黄白、一旦化為灰、蹉跎五十余、生世苦不諧　（「效陶潜体詩十六首」）
(3) …年顔日枯槁、時命日蹉跎、豈独我如此　（「寄同病者」）
(4) 故人対酒歎、歎我在天涯、見我昔栄遇、念我今蹉跎　（「答故人」）
(5) …蹉跎二十年、頷下生白鬚、何言左遷去、尚獲専城居　（「馬上作」）
(6) …青山方遠別、黄綬初従仕、未料容鬢間、蹉跎忽如此　（「初見白髪」）
(7) 三月江水闊、悠悠桃花波、年芳与心事、此地共蹉跎　（「春晩寄微之」）
(8) …病添心寂莫、愁人鬢蹉跎　（「晩秋有懐鄭中旧隠」）
(9) …四十著緋軍司馬、男児官職未蹉跎　（「聞李六景俭自河東令授唐鄧行軍司馬以詩賀之」）
(10) 身名身事両蹉跎、試就先生問若何　（「問韋山人山甫」）
(11) …転於文墨須留意、貴向煙霄早致身、莫学爾兄年五十、蹉跎始得掌絲綸　（「喜敏中及第偶示所懐」）

⑿ 西州彼此意何如、官職蹉跎歳欲除　（「歳暮枉衢州張使君書並詩因以長句報之」）
⒀ …麥風低冉冉、稲水平漠漠、芳節或蹉跎、遊心稍牢落　（「和微之四月一日作」）
⒁ …挙眼風光長寂莫、満朝官職独蹉跎、亦知合彼才名折、二十三年折太多　（「酔題劉二十八使君」）
⒂ …応笑蹉跎白頭尹、風塵唯管洛陽城　（「送徐州高僕射赴鎮」）
⒃ 病容衰惨澹、芳景晩蹉跎、無計留春得、争能奈老何　（「晩春欲携酒尋沈四著作先以六韻寄之」）
⒄ …行断風驚雁、年侵日下坡、片心休惨戚、雙鬢已蹉跎（「和東川楊慕巣尚書府中独坐感戚在懐見寄十四韻」）
⒅ 歳陰生計両蹉跎、相顧悠悠酔且歌　（「酬夢得貧居詠懐見贈」）
⒆ 少年莫笑我蹉跎、聴我狂翁一曲歌、入手栄名取雖少、関心穏事得還多　（贈諸少年）

右の諸例から、具体的に見てみよう。⑴は、古詩十九首にならった作の第七首。縁あって豪家に嫁した女性が、出世した夫が群れなす妾らの誹謗中傷のことばを信じて、ひとり礼儀を守って暮らしているわが正しい心を察してくれず、ますます恩情が薄くなったと嘆いた。「言の玷あるを信じて」とは、妾たちの讒言を夫が鵜呑みにして、の意。こうして、まだ容色もおとろえていないのに、夫の愛がなくなってしまったというのである。恩愛がこちらの思うようにならぬことを、「蹉跎」というのだろう。閨怨詩の類であるが、楽天のいわんとするところは、じつは寵を失った女性の悲しみではない。この一作はつぎのように結ばれている。

盈盈一尺水、浩浩千丈河　　盈盈たる一尺の水、浩浩たる千丈の河。
勿言小大異、随分有風波　　言ふ勿かれ小大異なれりと、分に随つて風波有り。
閨房猶復爾、邦国当如何　　閨房すら猶ほ亦爾り、邦国当に如何なるべき。

たかだか一尺の流れでも千丈の広がりをもつ大河でも、ものの道理というものはひとつしかなく、それぞれ分相

応に波風が立つ。夫婦の間のいざこざも、これと同然。国家の君臣関係もこれにひとしいのだ。楽天は、真摯につかえながらも寵を失ってしまった「冢婦」（正妻・主婦）に、才能がありながら時に遇わない家臣をたとえて憂い嘆くのである。

じつは「蹉跎」の用例のほとんどは、こうした慨嘆する作品に見られるのに注視できよう。短い作品からもう二例あげてみると、こうである。まず(4)「答故人」から。

故人対酒歎、歎我在天涯　　故人酒に対して歎ず、我が天涯に在るを歎ず。
見我昔栄遇、念我今蹉跎　　我が昔の栄遇を見、我が今の蹉跎たるを念ふ。
問我為司馬、官意復如何　　問ふ我れ司馬と為りて、官意復如何と。
答云且勿歎、聴我為君歌　　答へて云ふ且く歎ずる勿れ、我が君が為に歌ふを聴け。
我本蓬蓽人、鄙賤劇泥沙　　我は本蓬蓽の人、鄙賤泥沙よりも劇し。
読書未百巻、信口嘲風花　　書を読むも未だ百巻ならざるに、口に信せて風花を嘲る。
自従筮仕来、六命三登科　　筮仕してより来、六たび命ぜられ三たび登科す。
顧慙虚劣姿、所得亦已多　　顧みて慙づ虚劣の姿、得る所亦已に多し。
散員足庇身、薄俸可資家　　散員も身を庇ふに足り、薄俸も家を資く可し。
省分輒自愧、豈為不遇耶　　分を省みて輒ち自ら愧づ、豈に不遇と為さん耶。
煩君対杯酒、為我一咨嗟　　煩はす君が杯酒に対し、我が為に一たび咨嗟するを。

これは元和一〇年（八一五）楽天が江州司馬に左遷されたおり、わがことのように嘆いてくれた親しい某人に答えた作。この年、宰相武元衡が暗殺され、長安市中ふるえあがるという事件が起きた。楽天はすぐさま上疏して、

ただちに犯人を逮捕し国辱をすすぐべきであると要求する。ところが、政府筋はそれを東宮官のひとりにすぎなかった楽天の越権行為だとして、いい顔をしない。そこへ突然、母が井戸に落ちて亡くなったのに、新井篇を創作するようなのが楽天であり、ことばは軽薄であり実践する力もない、という告発がある。その結果、楽天は中央から出されて刺使として左遷されることになる。

ところが中書舎人の王涯なる人物が、その任命にも反対の言を奏上。さらに身分を降ろされて、辺境の江州（江西省九江市）の司馬となったのである。以上は、『新唐書』（巻119）の語るところで、同『新唐書』は楽天の心境を「失志」と記している。

知己に同情され慰められた楽天は、詩の一作をもって答える。もともと貧しく賤しい出であり、学も大して修めていないこの身でありながら、口にまかせて花鳥風月をもてあそび、官僚になってからは、六度君命を受け三度試験に及第する栄誉にも浴した。司馬に任じられたこととて、じつに分に過ぎる利得ではないか。閑職とはいえこの身を守るにはじゅうぶんだし、薄給でも家計をたすけてくれるのだから、どうして不遇だといえようか。せっかくの酒の席で、あなたがわたしのために嘆いてくれるのは、感謝にたえないが…。

右のような作品の文字面とはうらはらに、貶される楽天のやり場のない嘆きが聞こえてきそうである。

もう一例、⑲「贈諸少年」をあげてみよう。

少年莫笑我蹉跎　　少年笑ふ莫れ我が蹉跎たるを、
聴我狂翁一曲歌　　我が狂翁一曲の歌を聴け。
入手栄名取雖少　　手に入る栄名は取ること少しと雖も、
関心穏事得還多　　心に関する穏事は還つて多きを得たり。

老慙退馬霑芻秣　老いて慙づ退馬の芻秣に霑ふを、
高喜帰鴻脱弋羅　高く喜ぶ帰鴻弋羅を脱するを。
官給俸銭天与寿　官は俸銭を給し天は寿を与ふ、
些些貧病奈吾何　些些たる貧病吾を奈何せん。

会昌二年（八四二）、武宗は楽天を宰相にしようとしたものの、李徳裕の反対にあって断念、そのかわりに楽天の従弟である白敏中を翰林学士にするという動きがあった。楽天はこれをよしとせず、太子少傅を辞し、刑部尚書をもって致仕する。会昌六年（八四六）八月には七五歳で没しているから、その間に創作し少年某らに贈られたのだろう。少年たちよ、笑わずにわたしの狂歌の一曲なりと聞くがよい、とうたう。楽天には別に「狂吟七言十四韻」があり、「…自ら想ふ身は富貴の身に非ず、但恐る人間長物となるを、如かず林下遺民と作るに」と、「長物」（無用の長物）と考えていたらしい。

誉れを得たことこそ少ないが、そのかわりに、心は安らかであり穏やかでいられる。恥ずかしながら、「帰鴻」が糸弓や網にかからないように災禍を逃れ、「退馬」（役に立たなくなった馬）の我が身は「芻秣」（馬の餌）つまりは俸禄をもらって暮らしていける。少しぐらいの貧乏や病は意とするに足りないのだ、と。

なるほど、朋友である元稹が宰相（同中書門下平章事）となったものの、たった四カ月で辞職、太和五年（八三一）七月に武昌軍節度使となり、任地でわずか一日の病で没した（五三歳）ことを思えば[17]、楽天のいうところもわからないではないが、「長物」であり「退馬」であることの悲しみこそ、楽天の心底の情であったと解すべきだろう。

「蹉跎」とは、志を途絶させられた悲憤と慷慨の謂いなのである。それは道真「開元の詔書を読む」の「蹉跎」

が意味するところも同然だろう。そして、こうした「蹉跎」と「鯨鯢」とは、じつは同じ憂憤の地平から顕ってくるのだ。

四

『文選』（巻41）の李少卿「蘇武に答ふる書一首」に眼を転じてみたい。この一書が書かれた事由は本文中にも書かれているが、蘇武（前一四〇～前六〇）が匈奴から帰国したのちに李陵（？～前七二）から蘇武に書簡がもたらされ、蘇武もそれに返書を送ったらしい。蘇武の返書を読んだ李陵は、再度筆をとって先の書簡で述べ尽くせなかった思いを記したというのである。

先の二書簡は散逸して残っておらず、その逸文が『芸文類聚』（巻30）に見える。李陵が与えた書簡の内容は、おおよそつぎのようなものである。帰国したあなた（蘇武）の名声は漢と匈奴の両国にひろく知れわたり、天子のこのうえない寵を得、志を立て仁を得た。それにひきかえこのわたし（李陵）は、歩兵五〇〇〇を率いて三〇〇〇余里を踏み匈奴に攻め入ったものの、身は匈奴に降り名を辱めてしまった。その結果、老いた母の命すら救うことができなかった。世間は誤っているのではないか。功者は幸いをもって主とすべきなのに今は禍をうけ、忠者は義をもって評価されるべきなのに、今は重い患いを受けているではないか（世事謬矣、功者福主、今為禍先、忠者義本、今為重患）。蘇武は帰朝し今ふたりは漢と匈奴の二国にわかれて仕え、生きてようと死んでしまおうと、もはや逢うこともあるまいから、心を通わせることなどありえまい。

これに対して、蘇武からのはやや長い断簡が残っている。これも内容をまとめてみよう。わたし（蘇武）は匈奴

に使いし、無人の地に幽閉されながらも、天子への忠節をもってのみ生きながらえ、九死に一生を得た。あなた（李陵）の才能は世にまれなるものがある。たしかにあなたは家族を殺され、功名は現れず、生きるのも死ぬのも大した差はない。それより、あなたも漢にもどり、功を竹帛に記されて千代に名を伝えられ、よい待遇を受けるのがいい（書功竹帛、伝名千代、茅土之封、永在不朽、不亦休哉）のではないか。異俗の人となり生きながらえても、どうして故郷を懐かしく思わずにいられようか（死生隔絶、岱馬越鳥、能不依依）。「岱馬越鳥」は、たとえば「古詩十九首」（第一首）の「胡馬依北風、越鳥巣南枝」と同じ意。拭いがたい郷愁をいう。漢と匈奴の間の紛争は解決したのであり、李陵よ、すでに事はおわったのだ（嗟乎李卿、事已去矣）、匈奴から帰朝しなさい。これが蘇武の返書の大要である。

「蘇武に答ふる書一首」を一読してみよう。

子卿足下、勤めて令徳を宣べ、名を清時に策し、栄問休く暢ぶ。幸甚幸甚。遠く異国に託するは、昔人の悲しめる所なり。風を望み想を懐いて、能く依依たらざらんや。昔者遺れず、遠く還答を辱うす。慰誨は懃懃として、骨肉に踰ゆる有り。陵は不敏なりと雖も、能く慨然たらんや。

書簡の冒頭で、子卿（蘇武の字）が昭帝のみ世で美徳をひろめ、天子に認められて天子からことばをいただくようになったことを、ことほぐ。次いで、遠い夷狄の地にあり、過酷な自身の暮らしぶりを述べるくだりは、こうである。

初め降りし自従り、以て今日に至るまで、身は窮困し、独坐して愁苦す。終日覩るもの無く、但異類を見るのみ。韋韝毳幙、以て風雨を禦ぎ、羶肉・酪漿、以て飢渇に充つ。目を挙げて言笑せんとするも、誰と与にか歓を為さん。胡地は玄氷し、辺土は慘裂して、但悲風蕭條たるの声を聞くのみ。涼秋九月、塞外草衰ふ。

夜寐ぬる能はず、耳を側けて遠く聴けば、胡笳互に動き、牧馬悲しく鳴く。吟嘯群を成し、辺声四に起る。晨に坐して之を聴けば、覚えず涙下る。嗟乎子卿、陵独りの何の心ありてか、能く悲しまざらんや。

匈奴に降伏した当初から今日にいたるまで、孤独で憂いに沈んでいる。終日見る人びとといえば夷狄ばかり。なめし皮の弓懸や毛氈の天幕で風雨をしのぎ、マトンや乳汁で飢えや渇きをいやしている。誰かと談笑するにもともに喜びあえる人もいない…。胡人の笛の音、放牧された馬のいななき、胡人らが口ずさむ辺境の歌、明け方に独り坐して耳を傾けていると、思わず涙がこぼれてしまう。胡の地にある李陵の悲しみはいやされることはないのである。

しかしながら、李陵がもっとも心を痛めて苦悩するのは、じつはこうした辺境の過酷な環境ではないのに、注視したい。

子と別れて後、益益復無聊なり。上は老母の年に臨んで戮せらるるを念ふ。妻子は辜無くして竝びに鯨鯢為られ、身は国恩に負き、世の悲しむ所と為る。子は帰りて栄を受け、我は留まりて辱めを受く。命や如何せん。身は礼義の郷より出づるに、無知の俗に入り、君親の恩を違棄して、長く蛮夷の域と為る、傷しいかな。先君の嗣をして、更に戎狄の族と成らしむ、又自ら悲しむ。

右のように「鯨鯢」の語句が見られるくだりである。帰国して栄誉を受けている蘇武にくらべ、わが身の匈奴に留まる恥と不運を述べている。『漢書』（巻54・李広蘇建伝）の李陵伝によれば、因杅将軍の公孫敖が李陵を救出する命をうけて匈奴に進軍したが、功なく漢に帰還したために、李陵が匈奴で軍事訓練をした匈奴の兵によって、命を果たすことができなかったと報告した。そのために陵の一族は殺戮されたと記している。じつは匈奴の兵を訓練したのは、李陵よりも先に降伏した李緒なる人物であって、李陵ではない。同じ姓だったために誤解されたらしい。

また李陵をかばってかえって罪を得、宮刑に処せられたかの司馬遷は、『史記』（巻49・李将軍列伝）に、匈奴の単于は李陵を捕らえたものの、その勇猛な戦いぶりに感心し、その娘を妻にやって手厚くもてなした。ところが、これが武帝の耳に入って怒りをかい、李陵の一族は皆殺しにされた、と記している。

李陵は、つづけて蘇武にいう。

功大に罪少なるに、明察を蒙らず、陵の心に孤負す。区区の意あり。一念至る毎に、忽然として生を忘る。陵心を刺して以て自ら明かし、頸を刎ねて以て志を見すを難らず。顧国家我に於て已んぬるかな。身を殺すとも益無し。適に羞を益すに足れり。故に臂を攘り辱めを忍ぶ毎に、輒ち復た苟も活くるのみ。左右の人、陵が此の如きを見、以て耳に入らざるの歓を為し、来りて相勧勉するも、異方の楽は、秖に人をして悲しましめ、忉怛を増すのみ。

自分の立てた功績は大きく、犯した罪は小さいのに、武帝の明察を得られず、自らの意に反したことになり生きる望みを失っている、もはや自尽し果てたところで、身のあかしを立て衷心を示すのはむずかしい、だから憤慨しながら恥をしのんでこの地で生きていくしかないのだ、と。周囲にいる匈奴の人びとが、こうして苦しんでいるわたしに、耳になれない異国の音楽を奏で、励ましてくれるものの、ただただそれは私を悲しませ、なおさら心を鬱屈させてしまう、と。「忉」は憂うこと、「怛」は痛むこと。匈奴にとどまる恥辱や運のつたなさ、そして天子に理解されなかった苦悩が、李陵を苛むのだ。

「功大罪小」とは、李陵が射士歩卒五〇〇〇を率いて匈奴に入り、ほかの五人の将軍たちは道に迷って李陵軍だけが匈奴軍とたたかい、匈奴の本隊八万に囲まれたたかうこと八日、刀折れ矢尽きて降ったのをいうのだろう。[18]

それでは、なぜ李陵は死を選択しなかったのだろうか。「子卿陵を視るに、豈生を偸むの士にして、死を惜しむ

の人ならんや。寧んぞ君親に背き妻子を捐てて、反て利を為す者有らんや」と述べ、あなた（蘇武）ならわたし（李陵）が生に執着して死をおそれるような人間ではないことをじゅうぶん知っているだろうし、天子や親に背き妻子を棄てて、何の我が身の利益とするものがいるだろうか、と。生きることに汲々としているわけではないというのである。つづけて、こう書く。

然るに陵の死せざるは、為す所有らんとすればなり。故に前書の言の如く、恩を国主に報いんと欲するのみ。誠に以ふに虚しく死するは節を立つるに如かず、名を滅するは徳に報ゆるに如かず、と。昔范蠡は会稽の恥に殉ぜず、曹沫は三敗の辱めに死せず、卒に勾踐の讐を復し、魯国の恥に報ゆ。区区の心に、切に此を慕ふのみ。何ぞ図らん、志未だ立たざるに怨已に成り、計りごと未だ従はずして骨肉刑を受けんとは。此れ陵が天を仰ぎ心を椎ちて血を流す所以なり。

李陵が生きて身をさらすのは、やり遂げたいことがあったからだ、というのである。それは天子への恩返しであり、犬死にするよりも名節を立てるほうがよいし、名誉をけがすより君徳に報いるほうがよい。越王勾踐は、呉王夫差に夫椒山で負けて会稽山に逃げ、范蠡や大夫種らと協議し、呉の太宰嚭にわいろを贈りとりなしを懇願して、難をのがれた。勾踐はその恥辱にたえ、国力を養い、その一〇年後に呉を討って夫差を自刃に追い込むのである。また力を頼みに魯に仕えていた曹沫は、魯の将となって斉と戦ったが、三度戦い三度敗北した。魯の荘公は斉の侵略をおそれ、遂邑の地を献上して、和睦をはかった。敗北の将となった曹沫だが、荘公はそれでも曹沫を将のポストから罷免しようとはしなかった。やがて曹沫は国辱をすすいだ。

こうした勾踐や曹沫のように、李陵が天子の恩徳にこたえようとしていた矢先、その一族は無慈悲にも処刑されたのだ。「天を仰ぎ心を椎ちて血を流す所以なり」のことばは、正念を失い慨嘆する李陵のすがたを彷彿させよう。

李陵の書簡はまだつづき、上述するふたりのような報われた忠臣とはうらうえに、漢がいかに功臣に報いることが薄く多くの賢明な人びとが辛苦を嘗めたかを列記する。[19] わが祖父李広も匈奴遠征のおり、単宇の居所を知って先陣を願ったがゆるされず、迂回を命じられてしたがったものの、途中、道にまよい戦に遅れた責任を追求され、自ら首をはねた。いや忠臣であるあなた（蘇武）自身もまた、そのよい例ではないかと、李陵は激高する。

丁年、使ひを奉じて、皓首にして帰れば、老母は堂に終り、生妻は帷を去る。此れ天下の聞くこと稀なる所にして、古今に未だ有らざる所なり。蛮貊の人も、尚猶ほ子の節を嘉す。況や天下の主為るをや。

壮年にして匈奴への使いとなり、白髪頭となって帰国した。年老いた母親はすでに亡くなっていたし、年若い妻はすでに再婚していた。こうしたことは世間にめったにあることではなく、古今にもない。蛮国の人びとでさえあなたの節義をほめたたえているのに、天下の主である天子なら、なおさらではないか。忠節をかたくなに守りとおしたあなたに対して、たかが銭二〇〇万、官位は「典属国」（蛮族で漢に降伏した者たちをつかさどる役人）、ほんのわずかの封地さえ、与えようとはしなかったではないか。そして、李陵は、

漢は厚く陵を誅むるに死せざるを以てし、薄く子を賞するに節を守るを以てす。…陵は恩に孤くと雖も、漢も亦徳に負けり。

と、心情を吐露する。死ななかったわたしへの罪は重く、忠節を守ったあなたへの報償は、これほどまでに薄かった。わたしは漢の天子の恩に背いたけれど、漢の皇室もまた天子の徳に背いて、わたしの母を殺し妻子を殺したのだから、もはや自分のとった行動への後悔がないことを表明するのである。[20]

ここまで、李陵の「蘇武に答ふる書」をたどってみたのだが、この書簡にある「妻子は辜無くして竝びに鯨鯢為られ、身は国恩に負き、世の悲しむ所と為る」の「鯨鯢」は、こうした文脈（コンテクスト）において解釈すべき表現なのである。

「鯨鯢」とは、李善注が当該部に『春秋左氏伝』（宣公一二年）から「古者の明王、不敬を伐ち、其の鯨鯢を取りて之を封じ、以て大戮を為す。杜預曰く、鯨鯢は大魚なり、以て不義の人の小国を呑食するに喩ふ」というように、不義不敬の大罪人であり殺されてしかるべき存在を意味する。李陵の妻や子は罪もないのに、こうして「鯨鯢」として殺されたのだった。

道真の場合は、もちろんすこし事情を異にする。道真の妻や子ではなく、「人は遣ふ　汝が新しき名なりと」と慨嘆する。不義不敬の悪漢とは道真自身なのだ。ゆえに、なおさら「舟を呑むは我が口ならじ、浪を吐くは我が声ならじ」と「我」をくりかえしながら、強く否定するのだろう。道真の怒りとも悲しみともつかぬ、心情はどう解すべきだろうか。

子らのうち、長子の大学頭高視は土佐介に左降、二男の式部大丞景行は駿河へ、三男の右衛門尉兼茂は飛騨へ、四男の秀才文章得業生淳茂は播磨へ、それぞれ遠国へ流謫となった。妻や年長の女子たちは都に留め置かれ、大宰府へ同行をゆるされたのは、わずかに幼年の男女ふたりであった。[21] 一家は離散したのである。そして道真といえば、「鯨鯢」という殺すべき逆臣の汚名を与えられて、いまや大宰府にいる。黄色の勅書に「鯨鯢」の二文字を見たときの道真のありさまは、まさに「精霊を喪」った、生けるしかばねにひとしかったと思われる。

五

それでは、いにしえの李陵が蘇武に「生きては別世の人と為り、死しては異域の鬼と為り」（「蘇武に答ふる書一首」）と述べるように、道真もまた「郵亭余ること五十、程里三千に半」（「敍意一百韻」）する、この天涯の筑紫で

生きようと決心しただろうか。道真絶筆の「謫居春雪」は、このあたりの事情を語ってくれる。

盈城溢郭幾梅花　城に盈ち郭に溢れて幾ばくの梅花ぞ
猶是風光早歳華　猶し是れ風光の早歳の華
雁足黏将疑繫帛　雁の足に黏り将ては帛を繫けたるかと疑ふ
烏頭點著思帰家　烏の頭に點し著きては家に帰らむことを思ふ

道真は延喜三年（九〇三）二月二五日に謫所で没している。おそらくこの年の一月頃にうたわれたものだろう。都府の内外にあふれているのは春雪。それが梅花がいっせいに咲いたかのように白一色の一日となった。「風光」「早歳の華」は、謝朓の「徐都曹に和す一首」（『文選』巻30「雑詩下」）、「休沐して重ねて還る道中一言」（『文選』巻27「行旅下」）などに学んだようだ。「風光」とは、風に吹かれて動かされる草や木が、日ざしをうけて輝くさま。「早歳の華」の「歳華」とは歳の始めの意。道真は歳の始めの意味をふくませながら、春告げの花として梅花をうたうのだろう。

謝朓の二作品は、たんに語句を借りたというのではあるまい。二作の全容は注にゆずるが、[22]前者は郊外に広がるうららかな春景色をながめながら、官を退きたい志をうたうのであり、後者は休暇を終えてふたたび都勤めにもどるとき、のどやかな春の景物に、官を棄てて静かに暮したい、という心をうたうのである。役職を棄てて官界を去りたい、静かに暮らしたいという思いは、そのまま道真の現在に通底するところがある。

さらに注目すべきは、「雁足…烏頭…」の表現だろう。周知のように「雁足…」は蘇武に由縁をもつ雁信（雁札とも）故事、「烏頭…」は燕丹に由来する故事をうたっている。雁信故事を確認しておけば、蘇武が匈奴に捕らわれて一九年を経たものの、帰京の望みを失うことなく、雁の足に便りを書いた白ぎぬをかけた。武帝は、足に帛書

が結ばれた雁を上林苑で射落とし、蘇武の無事とその真情を知って、使いを出して助け出したというのである。道真は雁の足に春の雪がねばりついているのを見て、都からの便りではないかと期待するのである。先に見たように、李陵は都にもどった蘇武が「薄」をもって処遇されたことを指摘するのだが、道真はその蘇武にわが身を比してやまないのである。

「烏頭…」は燕の太子丹にまつわる烏頭変毛の故事。戦国時代末期、燕に生れた丹は、幼くして趙の人質として送られた。同じく人質だった秦の政（のちの始皇帝）と親しくしていた。その後、燕の国にもどり太子となり、使者として秦へ行き昔なじみの政にあいさつしたが、政のあつかいは冷淡なものだった。秦王は帰国をゆるさず、もし烏の頭が白くなり馬の頭に角が生えたら許そうといった。丹が天を仰いで嘆くと、烏頭は変毛し馬には角が生じた。それで燕へ無事もどることが出来たという（『史記』「刺客伝」論）賛注）。降りしきる都府楼の雪が烏の頭に積もり、まるで烏頭が白くなったようだ、これで帰京できるかもしれない、と郷愁が道真を責め苛むのである。[23] ただ、つぎのような王充の『論衡』「感虚」のくだりもまた、道真は読んでいたはずである。

伝書に言ふ、燕の太子丹、秦に朝し、去ることを得ず、秦王に従ひて帰らんことを求む。秦王之を執へ留む。之と誓ひて曰く、日をして再び中し、天をして粟を雨らしめ、烏をして頭を白くし、馬をして角を生じ、厨門の木象をして肉足を生ぜしめば、乃ち帰るを得ん、と。此の時に当り、天地之を祐け、日為に再び中し、天粟を雨らし、烏頭を白くし、馬角を生じ、厨門の木象肉足を生ず。秦王以て聖と為し、之を帰す、と。

『史記』賛注と大同小異の内容で、さらに木像の肉足、太陽の二度の南中、天から籾が降る、くりやの入り口の木像に肉の足がつく、などなど異常なできごとがつづき、秦王は丹を聖人だとして帰国させたのだという。ところが、王充は「此の言は虚なり」（まっかな嘘っぱち）と喝破する。

燕の太子丹は何人ぞ、而も能く天を動かすや。聖人の拘はるる、天を動かす能はず。太子丹は賢者なるに、何ぞ能く此を致さん。夫れ天能く太子を祐け、諸瑞を生じ以て其の身を免れしむるは、則ち能く秦王の意を和げ、以て其の難を解けばなり。拘はるるの一事は易く、瑞を生ずるの五事は難きに、一事の易きを舎き、五事の難きを為すは、何ぞ天の労を憚らざるや。

かつて聖人が捕らわれてさえ天を動かせなかったのに、太子丹ぐらいで何ができようか。天が太子に味方したというなら、よく秦王の意を和らげて、難問を解決したからであり、捕縛されているという問題などいとも簡単に解決するのに、五つの難問のほうを解くなど、なんとも天はご苦労なことだ。これが王充の主張するところで、「なるほど」としかいいようがあるまい。こうしてみると、烏頭が白くなれば帰京できるとは、所詮「虚」でしかないのである。たたみかけるように、王充はさらに具体的な例を書き重ねる。

湯は夏台に囚はれ、文王は羑里に拘はれ、孔子は陳蔡に厄せらる。…天何ぞ夏台・羑里の関鑰をば毀敗し、湯文歩（渉）出し、粟を陳蔡に雨らし、孔子をして食飽せしめざりしや。太史公曰く、世、太子丹の天をして粟を雨らし、馬をして角を生ぜしむと称するは、大抵皆虚言なり、と。太史公は漢の世の実事を書せし人、而るに虚言と云へば、実に非ざるに近きなり。

天が感動するというのなら、湯王や文王が捕らえられている夏台・羑里の鍵をこわしてふたりをゆったりと出歩かせ、陳蔡の野で飢えている孔子に粉を降らして、腹いっぱい食わせようとしなかったのか。「太史公」（司馬遷）が「虚言である」といっているのが、あたっていよう、と。

道真が、こうした論を理解できなかったはずはない。にもかかわらず、漢の蘇武と燕の丹の動静に執するのはなぜだろうか。蘇武は一九年の歳月を辛苦のうちに匈奴で耐え、たとえ帰国しても厚く処せられることはなかった。

太子丹はかろうじて燕にもどったけれど、ついには秦王のおくり込んだ軍隊によって殺されたのだが、それでもなお蘇武や太子丹の境遇に身をよせていくのは、詩作上の文飾とはいえまい。司馬遷や王充のことばをかりていえば、「薄」と「虚」、これが蘇武と燕丹の後半生を形容する語だといってよい。たとえそうであっても、道真はこのふたりの生涯によりそいながら、望郷のはげしさを懐かずにはいられなかったのだろう。

李陵は匈奴で二〇年あまりを暮らし、そこで没した。道真もまた辺土にあったのだが、ついに李陵にはなれなかったのである。京を追われて二年、大宰府南館で「鯨鯢」が死んだ。

注

(1) 白楽天以外には、先行する李白に「尋魯城北范居士失道落蒼耳中見范置酒摘蒼耳作」があり、「…還傾四五酌、自詠猛虎詞、近作十日歓、遠為千載期、風流自簸蕩、謔浪偏相宜、酣來上馬去、卻笑高陽池」と詠っているが、「自詠」は題名ではない。また後代には、李群玉に「九日」があり「…絲管闌珊帰客尽、黄昏独自詠詩迴」という。題名と見られるのは、陳黯「自詠豆花」、唐彦謙「自詠」、鄭谷「結綬鄠郊縻摂府署偶有自詠」、徐夤「自詠十韻」、徐霊府「自詠二首」といった諸例がある。)。

(2) 「藍尾酒」は屠蘇酒をいう。新年の屠蘇酒は年少から順に呑みまわすのが慣例で、老いた楽天は最後に呑むところから、「藍尾」の酒と詠じたもの。

(3) 「知非年」は五〇才をいう(『淮南子』原道訓)。

(4) 「翛然」(無心に自然にしたがうように)は、「大宗師篇」に出てくることばで、「古の真人は生を説ぶを知らず、死を悪むを知らず。其の出づるも訴ばず、其の入るも距まず。翛然として往き、翛然して来るのみ。其の始まる所を忌まず、其の終る所を求めず、受けて之を喜び、亡ひて之に復る。是を之れ心を以て道を捐てず、人を以て天を助けずと謂ふ。是を真人と謂ふ」と。

(5) 紀野一義氏によれば、「『ヴィ』というのは離れること。マラは垢。垢がない、汚れがないという意味である」(『維摩経』仏教講座9)。

(6) 「是の身は聚沫の如し、撮摩ふ可からず。是の身は泡の如し、久しく立つことを得ず。是の身は炎の如し、渇愛より生ず、是の身は芭蕉の如し、中に堅有ること無し。是の身は幻の如し、顛倒より起こる。是の身は夢の如し、虚妄の見為り。是の身は影の如し、業縁より現ず。是の身は響の如し、諸の因縁に属す。是の身は浮雲の如し、須臾にして変滅す。是の身は雷の如し、念念に住らず。是の身は主無し、地の如き為り。是の身は我無し、火の如き為り。是の身は寿無し、風の如き為り。是の身は人無し、水の如き為り。是の身は不実なり、四大を家と為す…」『維摩詰所説経』「弟子品」(『国訳一切経』経集部6)。

(7) 「不二法門」(絶対的な悟りの境地) とは何かについての菩薩たちの問答録。たくさんの菩薩たちが、最後は文殊と維摩が、それぞれの知見を披露している。「爾の時、維摩詰 衆の菩薩に謂ひて言はく、『諸の仁者よ、云何が菩薩不二法門に入るや。各所楽に随つて之を説け』と。会中に菩薩有り、法自在と名く。説きて言く、『諸の仁者よ、生と滅とを二と為す。法は本不生なり、今則ち滅無し。此の無生法忍を得る、之を不二法門に入ると為す。』と。徳守菩薩曰く…不眴菩薩曰く…徳頂菩薩曰く…是の如く諸の菩薩各各説き已りて文殊師利に問ふ、『何等か是れ菩薩不二法門に入るや。』と。文殊師利曰く、『我が意の如くんば、一切の法に於て言も無く、説も無く、示も無く、識も無し、諸の問答を離る。是を不二法門に入ると為す。』と。是に於て文殊師利維摩詰に問ふ、『我等、各自ら説き已んぬ。仁者当に説くべし。何等か是れ菩薩不二法門に入るや。』と。時に維摩詰黙然として言無し。文殊師利歎じて曰く、「善い哉、善い哉、乃至文字語言有ること無し。是れ真に不二法門に入るなり。」と。「不二法門」はことばで表現できない境地であるとしながら、ことばで表現してしまった文殊と、沈黙して一言も発しなかった維摩と、どちらがその境地を真に悟っているかは、もはや自明だろう。

(8) 「釈」は帝釈天、「梵」は梵天王、「世主」は帝釈天の外将である持国天・増長天・広目天・多聞天の四天王をいう。

(9) 五戒とは不殺生(むやみに生きものを殺さない)・不偸盗(ものを盗まない)・不邪淫(性に乱れがないようにする)・不妄語(うそをつかない)・不飲酒(酒を飲まない)。

(10) 『維摩詰所説経』で、訪れた文殊師利につぎのように説いている「癡と有愛とより則ち我が病生ず。一切衆生病めるを以て是の故に我病む。若し一切衆生の病滅すれば則ち我が病滅せん。所以何んとなれば、菩薩は衆生の為の故に生死に入る。生死有らば則ち病有り。若し衆生病を離るること得れば則ち菩薩も復た病無からん」。衆生は無知と生きたいという我欲で生きているから病となる。一切衆生が病んでいるのだから、わたしも病まなければ、病気になっている者たちを教えることはできない。ゆえに、方便

として病人となっている、と。衆生が解脱して病苦から解脱できれば、菩薩も病むことはないのである。

(11) 境武男氏『詩経全釈』。

(12) これは「不出門」にある表現。前後を掲示すると、「一たび謫落せられて柴荊に在りてより、万死兢兢たり蹋躇の情、…中懐は好し孤雲に逐ひて去る、外物は相逢ひて満月ぞ迎ふる、此の地は身の撿繫せらるることなくとも、何為れぞ寸歩も門を出でて行かむ。」。官位をおとされ流されてあばらや住まい、もはや命は助かるまいと恐れおののき、肩をすぼめて小股であるく。心のなかはちぎれ雲よろしく吹き飛んでしまったけれど、それでも外の景色は規則正しくめぐりめぐって、満月を迎えた。くくられてつながれているわけではないが、門を出てちょっと歩いてみようかという気にもならない。「不出門」という詩題も楽天に学んだように思われる。楽天に先行する、鮑溶、孟雲卿、高適、欧陽詹らの作品にも「不出門」の語句が見られるが、詩題とするのは楽天である。作品では「寄張十八」「朱陳村」「病起」「新居早春」「飽食閒坐」「夏日閒放」などに、「不出門」の語句が散見される。

(13) 白楽天の作品は、佐久節氏『白楽天全詩集』(続国訳漢文大成)によるが、一部、岡村繁氏『白氏文集』(新釈漢文大系)を参照にした。

(14) 小林信明氏『列子』(新釈漢文大系)による。

(15) 『日本後紀』延暦一八年二月の「和気清麻呂薨伝」によるなら、当初、斬刑は三七五人だったらしい。清麻呂の姉にあたる広虫(法均)の諫めで死刑を減じられたという。

(16) 「…悠悠天地間、委順無不楽、良辰不可遇、心賞更蹉跎」(張九齢「雑詩五首」)、「…蜀相吟安在、羊公碣已磨、今図猶寂寞、嘉会亦蹉跎」(張九齢「登襄陽峴山」、「…故人金華省、粛穆秉天機、誰念江漢広、蹉跎心事違」(崔湜「襄陽早秋寄岑侍郎」)など。

(17) 『旧唐書』(巻116)に「四年正月、検校戸部尚書兼鄂州刺史御史大夫武昌軍節度使。五年七月二十二日、暴かに疾み一日にして鎮に卒す。時に年五十三。尚書右僕射を贈らる。子有り道護と曰ひ、時に年三歳」という。

(18) 李陵自身は蘇武への書簡で、「五千の衆を以、十万の軍に対し、疲乏の兵を策ちて、新羈の馬に当る。…匈奴既に敗れ、国を挙げて師を興し、更に精兵を練り、強は十万を踰え、単宇陣に臨み、親しく自ら合囲す」と書いている。兵の数は異なるものの、どちらにしても李陵軍が圧倒的な匈奴の軍事力にさらされたことにかわりはない。

(19) 宰相の蕭何、舞陽侯の樊噲、淮陰侯の韓信、梁王の彭越、御史大夫の鼂錯、絳侯の周勃、魏基侯の竇嬰、太中大夫の賈誼、丞

相の周亜夫など、才能があり功績のある臣が捕縛されて失脚し、塩づけにされたり死刑になったりしたことを述べている。

李陵は書簡のなかで、これら諸氏をめぐる政局の動静をこまかく記述しているわけではないが、蘇武はつぶさに知っていることがらだったことはいうまでもない。

(20) 李善注は、このあたりに『論語』「里仁」の「徳孤ならず、必ず鄰有り」を引いている。敗北して匈奴に捕らえられた罪はともかくも、李陵への評価は分れていたようで、弁護して武帝の怒りにふれ宮刑に処せられた司馬遷は、友人である任安にその時の情況について、つぎのように書いている（「任少卿に報ずる書一首」）。任安は衛太子の叛乱に連座し死刑を宣告されて、獄中にあった。

…陵未だ没せざる時、使ひ来たりて報ずる有れば、漢の公卿王侯は、皆觴を奉じて寿を上る。後数日、陵の敗書聞せらる。主上は之が為に食味はひを甘しとせず、朝を聴いて怡ばず。大臣憂衢して、出す所を知らず。…身は陥敗すと雖も、彼其の意を観るに、且つ其の当を得て、漢に報いんと欲す。事已に奈何ともす可き無し。其の堆敗する所の功、亦以て天下に暴すに足れりと。…僕は懐に之を陳ぜんと欲すれども、未だ路有らず。適適召問に会し、即ち此の指を以て、陵の功を推言し、以て主上の意を広め、睚眦の辞を塞がんと欲すれども、未だ尽くは明かす能はず。明主暁らずして、以為く僕貳師を沮して、李陵が為に遊説すと。遂に理に下せり。拳拳の忠、終に自ら列する能はず。因て上を誣ふと為し、卒に吏議に従ふ。…

李陵が奮闘して戦況を報告してきたときには、大臣や王侯たちは酒杯をあげて天子のために万歳をしたのに、戦況が思わしくない報告が届くと、天子は食事が進まず政務も滞りがちとなり、大臣たちは何をしてよいのやらわからぬ始末。いかにも李陵は敗北し捕らえられたのだが、その心中を察すると、きっと敗戦の罪をあがなう手がらをあげて漢に報いようと考えていたにちがいない。敗北という事実はどうすることもできないものの、李陵が匈奴に果敢に立ち向かった功績は、天下に明らかにするに足るものではないか。李陵の戦功を推賞し落胆する天子の心を慰め、群臣たちの非難を封じようとしたが、聡明な（はずの）主上はそれを理解しないで、わたし（司馬遷）が弐師将軍の邪魔をして李陵のために宣伝するものとして、腐刑のくだされてしまった、と。

文中の「明主暁らずして」の一言は、義憤をともなう強烈な批判となっている。

(21) 遠国へ流された子らも辛苦をなめただろうが、在京の妻らもまた苦しい暮らしだったようだ。このあたりを「家書を読む」で「…西門の樹は人に移されて去りぬ、北地の園は客をして寄り居らしむ、…妻子の飢寒の苦しびを言はず、これがために還りて愁へて

余を懐し悩すなり」とうたっている。ガーデニングが趣味だった道真邸には、すばらしい草木が植えてあったらしい。それを生活のために売ったのであり、北側の園の空き地は人に貸しているというのだ。

(22) 二作を『文選』から引用して紹介する。

・宛洛佳遨游　宛洛遨游するに佳く、
春色満皇州　春色皇州に満つ。
結軫青郊路　軫を青郊の路に結らし、
迥瞰蒼江流　迥かに蒼江の流れを瞰る。
日華川上動　日華は川上に動き、
風光草際浮　風光草際に浮ぶ。
桃李成蹊逕　桃李蹊逕を成し、
桑榆陰道周　桑榆道周を陰ふ。
東都已俶載　東都已に載を俶む、
言帰望緑疇　言に帰りて緑疇を望まん。　（巻30「徐都曹に和す一首」）

・薄遊第従告　薄遊して第く告に従へば、
思閑願罷帰　思ひ閑かにして罷め帰らんことを願ふ。
還邛歌賦似　邛に還らんとすれば歌賦は似るとも、
休汝車騎非　汝に休はんとすれば車騎は非なり。
霸池不可別　霸池は別る可からず、
伊川難重違　伊川は重ねて違り難し。
汀葭稍靡靡　汀葭は、稍か靡靡として、
江菱復依依　江菱は復た依依たり。
田鶴遠相叫　田の鶴は遠く相叫び、

沙鴇忽争飛　沙の鴇は忽ちに争ひ飛ぶ。
雲端楚山見　雲の端に楚山見れ、
林表呉岫微　林の表に呉岫微かなり。
試与征徒望　試みに征徒と与に望むれば、
郷涙尽沾衣　郷涙尽くに衣を沾せり。
頼此盈罇酌　此の罇に盈てる酌に頼り、
含景望芳菲　景を含みて芳菲を望む。
問我労何事　問ふ我何事にか労すると、
沾沐仰清徽　沾沐して清徽を仰げり。
志狭軽軒冕　志は狭くして軒冕を軽んずるも、
恩甚恋重闈　恩は甚しくして重闈を恋ふ。
歳華春有酒　歳華にして春に酒有れば、
初服偃郊扉　初服して郊扉に偃しなん。　（巻27「休沐して重ねて還る道中一首」）

「沾沐」は天子の恩沢に浴すること、「清徽」は清らかで美しい道のことだが、ここでは天子の徳をいうのだろう。「軒冕」は車と冠の意で、官位をあらわす。「重闈」は天子の重門の意。もともとどのようなことに心をつかっているかといえば、み恵みを受けて、帝につかえること。志がせまいので、官位などほしいとは思わないが、天子の威徳があまりにも厚いので、宮廷が慕われてならない。春に熟した酒もあることだから、都へもどり、ただ人となり、わが家で暮らしたい、と。道真の心情に似る。

(23)　引用は、山田勝美氏『論衡』（新釈漢文大系）による。王充は後漢の光武帝の建武三年（二七）に生れ、和帝の永元八年（九六）七〇歳から七八歳までのあいだに没したといわれる。日本への伝来は、いつの時代だったかはわからない。書名が具体的に残るは、寛平年間に作られた藤原佐保の『日本国見在書目録』で、「論衡三十巻。後漢徴士王充撰」と見える。